

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年
5月号

毎月23日発行
通巻429号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



クリの花 井手 泉さん撮影

昭和37年5月23日 月次祭法話より

神ながらの道 基礎的理解のために

法主 矢追 日聖 (51歳)

大倭の宗教

大倭の宗教というのは、一言にいつて、神ながらの宗教でございます。

けれども、みなさんの中には案外、「神ながら」ということが分かりにくい、はつきりとかんでいないという方が多い。そういう人がずいぶんあるように見受けられますので、本日は「神ながら」についてかんとんに説明したいと思っております。

日本神道の特質

大倭の宗教、これは純然たる神ながらの道でございます。

仏教でもなし、キリスト教でもなし、日本の古来からあるところの宗教でございます。

それを神道と申しておりますけれども、神道には宗教としての哲理とか教えというものは、案外なされておりません。日本神道は、形でもってものを教えていく。形でものを悟らせていく。そんな行き方の宗教です。

そうした日本在来の宗教、それじゃあ誰が始めたか、誰がその法を説いたか。誰もいないわけです。

仏教の場合でありますと、釈迦という方が教えを説いておられる。キリスト教の場合はイエス キリストですね。

ところが日本の神ながらの宗教には、どなたか偉い方が、論理的に哲学的に教

理というものを作つて、法を説いたということはない。そういう特定の人は、こんにちまで誰もおられないわけです。だからして、日本の神道は見方によれば宗教じゃないんだという人もおります。大倭教でわれわれが説かんとする、また持つておる宗教的な内容というものは、これはいつから始まつたのか分からない。おそらく、地球ができたときからの教えであるんですね。

御幣・門松・鏡餅の例

形から入るひとつの例に、御幣がある。神社でお参りするときになんか、参拝者が並んで、神主さんにお祓いしてもらおう。御幣でもつて、左、右、左、というようにですね。御幣を振つて、たまつておるほこりを払う、たたき落とす。

これによつて、自分の心の垢を取る。実際のところ、御幣を振り回してみたつて、めつたに心の垢は取れない。また、これによつて悟るという訳でもない。けれどもそういうように、ひとつの形でもつて教えてきている。

お正月には門松を立てる。これも、神ながらの宗教から出てきたひとつの形です。

おん松、めん松を両方に並べる。陰と陽、これは両方でもつてひとつのものになる。その両方が調和していなければならぬ。それで、おん松、めん松を立てる。

陰陽合一、これも神ながらの法から出ておる。お正月に作るお餅、これは鏡餅といいますね。

だいたいあのお餅というのは、夫婦がよつてつくもんですけど、杵は男の道具、臼は女の道具を形どつてあるんですね。

陰と陽がひとつになつて、そこでお餅をつくつと、

できたお餅というものは子どもに形どつてあるんです。夫婦が寄つて、子どもをこしらえる、そういう意味なんです。

そうして、できた餅をまず神さまに供える。それを鏡餅というんですね。ふつうのお餅は鏡とは言いませんけど、お正月にお供えする大きなお餅だけは鏡餅という。

鏡ということば、これは古代、「影見」と言いました。鏡餅の鏡とは、両親の影、両親の肉體から別れたもの、親の物質の一部分が子どもに変化したもの、つまり自分の子どもという意味なんです。親が子どもをこさえるんですから、子どもを見れば親の姿が分かる。だから、子どもは鏡という。

そういうような意味から、お正月の場合は、夫婦が仲良う円満にやつておるんだと、それで、お餅をこしらえて、自分の子どもを形どつて、神さんに感謝のお供えをする。

行いの宗教

神ながらの道というものは、すべて形でもつて示してきている。ですから、大倭の宗教でも、理屈よりも行いの方が大事である。宗教的な理屈を百も承知しておつても、自分自身が行い、実行できなければだめなんです。それは大倭の宗教ではない。

純神ながらの宗教、純神ながらの道、これが大倭教の根本であります。まずそれをみんなが覚えてほしい。

われわれの教典

われわれの教典とするもの、われわれが頼るべ

き教理、それは、いまわれわれの目の前に在るところの自然の姿です。

この大自然が神ながらの宗教の教えです。この自然界の一切のもの、それが大倭教の教理、教えの根本です。

その大自然の一切、大自然のすべてをわれわれがよく理解して、日常生活の中に生かしていく。そして、自分たちの人生観を確立していく。これが大倭教の行き方です。

科学の役割

だからして、われわれの宗教から言えば、すべての自然、自然界にある一切のことが、われわれの教えの中心になつてくる。

現代の科学、それは植物学者、動物学者、鉱物学者、天文学者といったぐあいに、いろんな分野に分かれて研究されております。人間の知識のおよぶ範囲で、それぞれの学者が専門的立場において研究されておるんですね。一生かけて世界の学者たちが自然を究明してくれている。

これを私たちは喜ばなければいけない。神ながらの教えというものはすべて自然にあるのですから、その自然を究明してくれている科学者たちは、神ながらの道の一部分を担当して研究してくれている。

科学から宗教の世界へ

けれども、人間の知識、能力には限界がある。自然というものは、現代の科学ですべて究明できるほど、そんな浅いもんじゃありません。

そこにはまだまだ深いものがたくさんある。それはいわゆる心の世界であつて、われわれの信仰

するものが、自分の心のなかにおいて、人間の知識で及ばない世界を見ていかなきゃいけない。それがいわゆる悟りなんです。

科学者は、神ながらの道の初歩を究明してくれている。神ながらの宗教は、もちろん科学というものもその基礎にしなければいけませんけれども、科学を一步超越してもうひとつ奥の世界、いわゆる悟りの世界、われわれはそこまで入っていかなければならぬ。

私は常に、大自然に教えられる。私自身は、大自然のなかに動いている宇宙の根本神霊、天地自然の霊の動き、それらのあれやこれやを靈感とか霊の波長によつて掴んでおるがためにですね、ある程度、これが分かるんです。

しかし、これが分かったからといって、ただそれを知るだけではない。その大自然の心というものを、われわれ人間の世界に写さなければいけない。ここに宗教というものが生じてくる。ここに大倭教のひとつの役割がある。ただ手を合わせて神さまに拜むだけが大倭の宗教ではない。

自然界の姿・相互扶助

たとえば水と植物の関係、あるいは虫や小鳥と植物の関係、そういうふうにして自然界の関係をみていくと、大自然というものはみな、持ちつ持たれつ^①の相互扶助の形に仕組まれておる。これが天地自然の法則、姿なんです。

だから、自分さえよければいい、自分の家族だけ都合よく行けばいい、という心は、大自然には絶対通用しない。われわれがあまりに利己主義に流れて、自分だけがよければいいというような人生の歩み方をした場合に、一時はよろしいけれども、いつかかなにかの時期がきたときには、自分で

自分を自滅させてしまふ。滅んでしまふ。そういう結果が出てくる。

お互いに助けあうていくという自然の姿、これをわれわれが取り入れななきゃいけない。自分のことを考える場合には、同じように他人のことも考えていくという行き方でなければいけない。

「利益信仰と因縁因果の法則

積尊は因縁因果の法を説いています。自分がまいた種は自分に戻ってくる。積尊はここで、言葉を変えれば神ながらの道を説明されている。

皆さん方が仮に、ないことをあるように人に言いふらすとする。そうすると、それは人間の世界では分からんけれど、幽の世界においては、その言葉が残っているんです。そうして、自分から発した言葉によって、自分自身不幸をこうむるようなことが巡ってくるんです。

これは宇宙の法則です。春が来れば夏が来る。夏が来れば今度は秋が出てくる。秋が来たら冬が来る。そうしてまた春が来る。お月さんでもお日さんでも廻っている。出発が終点であり、終点はまだ出発になっていく。宇宙はそのように構成されてるんです。

人に憎まれるようなことをしておけば、その結果が出てくる。善行を施していけば、良い結果がいつかは巡ってくる。

この因縁因果の法則には絶対狂いがないんです。積尊は神ながらの道を完璧にお説きになっておるんです。

要するに神ながらの道というものをさえお互いに分かれば、仏教であろうとキリスト教であろうと、何教であろうと構わないんです。どの宗教が良くどの宗教が悪いというようなことは、ありえな

いんです。

ところが、宗教の看板をあげておつても、いかがわしい宗教、宗教の仮面をかぶつた非宗教的な団体が世間にたくさんある。そんなものに迷つてはいけません。

けれども人間はややもすると物質欲にかかつて迷いが生じる。この宗教に入れば災難がなくなる。この宗教を信仰することによってカネが儲かる。そんなことを言われると、欲に引つかかつて、その宗教に入っていく。そういうものは宗教とは言えない。信仰とは言えない。

自らを知る

昔のことわざに、「カニは甲羅におうた穴を掘る」というのがある。これなんかも、どなたか悟つた方が言われたことわざですね。われわれが、かいしよのないくせにかいしよのある真似をする^②と自滅するということなんです。

カニは自分の甲羅におうただけの穴を掘っていく。もし自分の甲羅よりも大きな穴を掘つた場合、そのあいだから外敵が侵入してくると、防ぐこともできない。自分が殺されてしまふ。それで、自分の体が入るだけの穴を掘るんですね。

こうして、カニの生き方ひとつを見ても、教えられるところがある。

このことわざには、神ながらの教えの根本がある。自分を知る、自分の能力を知る、能力の限界を知る。これがいちばん大事なことなんです。

遊んで考えておつても、これはダメです。できるだけの努力をする。人一倍の苦勞もする。そうすることによって、自分を知る。自分の能力の限界を知る。

神ながらの原理

これを理屈で言えば、要するに物質の世界というものは、一切が差別にできている。人間の顔を見て、ひとりひとり異なっている。これみな、差別なんです。

我も人なり、彼も人なりと誰でも言いたい。お金持ちになりたい。背が大きくなりたい。これは人間の欲望ですね。希望でもあるでしょう。

けれども、できないことがたくさんあるんです。生まれつき背の小さい者が、大きな背になりたいとどれだけ希望しても、これはできないことなんです。自分は力ネを儲ける能力がないのに、あそこの成金のように力ネを持ちたいとどれだけ努力したって、真似はできない。

林にはいろいろな雑木がある。ここにはススキがあり、池には睡蓮がある。こういうふうには、ひとつひとつみな別々のものが同じ場所にあるんですね。ひとつひとつみな異なっている。それが調和している。その調和が、これ平等である。

この神ながらの原理が、なかなか理解しにくいんですね。この神ながらの鉄則が分かりにくいために、いろいろな雑念が入ってくる。

本当の宗教性

ただ手を合わせて神さんに拝んだり、仏さんに拝むというのは、これは宗教ではないんです。本当の宗教性とは、自分を知り、人のこともよく知る。結局、自分というものを自分で治めるだけの悟りを持っておる人、大いなる慈悲の心を持つ人が、本当の宗教家ですよ。

自分というものを柵に上げて、手を合わせて神

鈴月かあさん帰幽五年祭

四月十九日、鈴月かあさんが帰幽されて満五年目のこの日、午後二時より拝殿にて祭典が執り行われました。穏やかに暖かい天気恵まれ、また普段の日にもかかわらずたくさんの方々がお見えになりました。かあさんのお人柄の氣に包まれてか、大らかでぎつくばらん、涙あり笑いありの祭典となりました。

祭典の間、祭主を務められた矢道家麻呂さんは、胸を詰まらせている様子でした。自分の意志では抑えられぬ涙だったそうで、「今日で顕幽不二ということが分かりましたわ」と話されました。霊界のかあさんから一言注意もあつたようで、「霊界に帰ってからもうるさいなあ」と、皆を笑わせていました。

その後は、かあさんの思い出ばなしに華が咲きました。青山日元さんは、法主さんに紹介されてかあさんと出会った時に、「これからお互いに拝んで、神さん仏さんの力を借りて自分の能力以上のことをやりたいというようなことは、強欲千万、絶対ダメなんです。ご利益をもらうことを目的として信仰する、これは神ながらの道には反しておるんです。

私が念願する110

水に住む魚は水のなかが幸せであり、陸に住む動物は陸におつてこそ幸せなんです。

人間にも、その人その人に応じた幸せがある。幸福といつても、その人その人によつてみんな違うんです。われわれ人間はお互いに十人十色、そ

い頑張り」と固く抱き合つた、「かあさんを女だと思つたことあらしません」というお話。中西正和さんは、かあさんは大倭の生活を蔭で支えて来られた方だというお話。矢追盛賢さん、矢追明昌さんは、子供の頃の思い出で、かあさんの叱り方は迫力があつたというお話。反保良さんは、かあさんに怒られたことはない、「いつもよくやってくれてすまんなあ」と言われたお話。かあさんの甥である森脇聖淳さんは、子供の頃に、まだあまり話したことのないかあさんが小さく小さく折りたたんだ五百円札を手にのせて下さった時に、「素敵な方だな」と思つたことや、かあさんの手のぬくもりは今も忘れないといつたお話。杉本順一さんは、昔かあさんが「何でこんなことをせんなんのや」と腹を立てていた時、霊界人に「過去世の宿執ならんや」と言われたという話を聞いたことがあり、宿執とはどういう意味かを昨日調べたとか、またその日、霊界のかあさんが「大倭の礎として生きた」と言われ、法主さん感謝しておられたというお話でした。(一章)

の幸福感というものが全部異なつておるんです。それをお互いによく自覚しなきゃいけない。自分にとつて良いと思つても、それを人に押しつけるようなことをしてはいけない。自分が幸せであっても、相手には不幸な場合がある。

皆さん方もそういうようなことをね、よく考えて、体験を通して得たところの悟りを持つてほしい。小さな意味、小さなことからいいですから、神ながらの道によつて、自分をまず治めて、まず幸せにしていく。そういうようなところから、少しずつ、自然の動きというものを、神ながらの味というものを、そうしたことを知つてほしいと念願するんです。

大倭会文化行事報告

第287回 平成18年3月19日

洛北、崇道神社・蓮華寺・三宅八幡へ

杉本 順一

肌寒い日曜日、京都叡山電車出町柳駅で集合した。雲行きが怪しくばらばらと雨が降り出した。近くのコンビニに雨傘を買いに行く人もちらほら。一両だけの電車なので大倭会の貸切りのようである。皆声が大きいか？ 三宅八幡駅につく。

私が大学に入ってから間もない頃、この駅近くに当時四回生の先輩の下宿があって、薄暗い夜道を歩いてその部屋を訪ねた思い出がある。

日元さんも大倭プロジェクトの施工班の仕事でこのあたりにきた日のことを、思い出されたそうである。

話はそれだが、私は当日の三日前から体調をくずして家で寝ていた。崇道神社に付いて考えた。

「ツクツタモノノ ココロシカ ナイナ（作つた者の心しかないな）」と法主さんから言われた。そんな所に文化行事で行く意味があるのかな？とも思ったが……。

かつて第十四回文化行事で神武天皇陵に行った時、この天皇陵についてお話を聞いて疑問に思った事を法主さんに尋ねたことがあった。

それは法主さんによると、この天皇陵はかなり新しい時代に作られたとの事だったので、文化行事としてここに来る意味があるのだろうかという疑問であった。

その時法主さんは「皆でこうして手を合わせたから、向こうから此処へ出てきよるねん」と教えてもらった事を思い出した。自分で納得して行く事にした。

崇道天皇と言えば早良親王のこと。「七八五（延暦四）年藤原種継暗殺事件に関わったとして廃太子された。淡路に流される途中で死去し、淡路に葬られた。桓武天皇はその怨霊を恐れ、八〇〇年、崇道天皇の尊号を贈った。（日本史広辞典 山川出版社）」

それでこの日となったのである。

何時ものように法主さんの奥津城で出発の挨拶をしたら、「天皇にあらざして逝つた者の気持ちを考えてやれ」との事だった。

これが今日行く意味の一つなのだろう。崇道神社入り口で記念撮影をして、参道を少し上るとこじんまりとした拝殿があった。

早良親王さんに挨拶したら「サワラシンノウ

第288回 平成18年4月16日

奈良豆比古神社く北山十八軒戸

岸野 春子

霧雨で寒い朝でしたが、集合の頃には晴れて暖かい日和となりました。参加者22（内小人2）人。昭和55年5月11日第105回の時も同じコース



野 保夫さん 写

ワガミノナナリ」とのこと、つまり崇道天皇という名は認めておられないように私は感じた。

その場で皆さんにこの言葉を伝えて、文化行事の意味を考える材料にもらった。

帰り際に「崇道神社は清めておけ」と法主さんから言われた。

次に蓮華寺を訪ねた。昔むした庭を眺め、池の鯉にほっと一息ついた。

昼食場所に予定してきていた三宅八幡まで三々五々歩いてゆく。

途中寒くはあったが、比叡山の山頂付近は雪が降り美しい眺めだった。

食事の間にも手が寒さで凍りつきそうだったが、早良親王さんの心境を察するに、こんなものだったか？と、この日のお天気も納得出来た。

で、中西正和会長さんは、甲野善紀さんが境内で真剣を抜いて「エイツ、エイツ」とお参りをされたことや、樹齢千年という大樟（写真）の霊が故山田八重子さんに憑依して法主さんと話をしたのには感動したという思い出を話してくれました。

ご祭神は平城津彦神（この土地の産土神）、施基（志貴）皇子、春日王のお三方で、3月の文化行事でお参りした早良親王とも近い関係という偶然に、世話人の湯浅芳郎さんは驚いていました（段取りをしておいてくれて当日は所用で不参加）。

天智天皇 施基皇子 光仁天皇 桓武天皇 春日王 早良親王

社務所をお借りして昼食の後、平らかな舗装道を、車椅子の青山日元さんも一緒に、般若寺、植村牧場に寄つて、北山十八軒戸まで散策。ここは鎌倉時代の僧 忍性がハンセン病患者のために作った建物です。故飯河梨貴さんは春日王がハンセン病だった？という説を調べていたものです。

逍遙遊を求めて……

私の祖父の巻

大阪府岸和田市 溝口省吾

私の父方の祖父は、一九四五年、故郷から二〇〇キロ近くも離れたハイラルの地で戦死した。ハイラルはソ連と満州帝国（当時）の国境に近い町で、祖父の属した独立混成第八十旅団は、ハイラル郊外に在った地下要塞を準備していた。

八月九日、ハイラルの町は、ソ連軍の急襲を受けた。ハイラル守備部隊は、圧倒的なソ連軍の完全包囲下に善戦し、八月十八日の停戦まで頑強に抵抗した。これによってハイラル在住者は後退することが出来、同時にソ連軍が新京（現在の長春）へ移動することを阻害した、と言われている。祖父は、八月九日から十八日の間、ポツダム宣言受諾後に、ソ連軍の機銃掃射に胸を射抜かれ重傷を負ったことが原因で、死んだらしい。

一九六七年生まれの私は、見たこともない祖父になぜか小さい頃から興味があった。もつとも祖父に対する小さいころのイメージは、悪逆無道の残忍な日本兵、在留邦人を犠牲にして我先にと逃げた関東軍の卑怯な兵士といった、申し訳ないほど単純なものだった。しかし成長するにつれ、若い妻と幼い子供三人を故郷に残し、遠く離れた戦地で死んでいった、祖父という一人の人間の気持ちを知りたい。生まれてから青年となり、結婚して子をなし、やがて戦地に赴き約三十年の短い生涯を戦場で突然閉じた一人の人間の気持ちを、少しでも知りたい。その気持ちをやみがえらせ我が身に引き受けたい。溝口家に生を受けた私の、この血族での小さな使命だと思ふようになった。

当時の新聞や書物を何年も読み続けた私は、いくら祖父の生きた時代の雰囲気を感じる事が出来るようになり、それなりに祖父の気持ちにも迫れるようになった。しかしハイラルは遠く、個人で行ける場所かどうかさえ分からない。まして、今は仕事にも責任があり、何日かかるか分からない旅になど出れない。ここ大阪で、心の中で祖父に結びつき、慰霊すれば良いだろうと思っていた。ところが、数年前の十二月。おそらく祖父からのハイラル行きの催促だと思えるものが激しくあり、重い腰を上げて行くことを決心した。

明るる年の春、瀋陽（当時の奉天）から長春、ハルビンと列車を乗り継ぎながら、内蒙古自治区ハイラルに到着。ハイラルは、酪農製品の製造で成り立っている小さな町だが、ソ連との国境に近いせいか、軍関係の施設が多い。

新華書店でハイラル郊外の地図を買い、出発前に手に入れていた防衛研究所の資料と照らし合わせて、三つの陣地の大体の見当をつけた。翌日タクシーを使って陣地を探すが、しかし、これが見つからない。ハイラル郊外は、砂漠と緑野の単調な平面上に、岡が点々とあると言った感じの捉え所のない地勢なので無理はない。しかも岡を一々上らなければ確認できない。

少々焦ったものの、何とか一つ目の陣地を発見した。岡の頂上には、爆破されて飛び散ったコンクリートの塊や、塹壕らしい窪みがたくさん確認できた。寂しい情景だ。

その翌日、この一つ目の陣地を基に、祖父の居たハイラル地下要塞を見つけることが出来た。中に入ると、その広さに驚いた。そして体が震えだすほどの寒さと、静寂。少し大きめの部屋があったので、そこで慰霊することにし、霊人に話しかけてから祝詞を唱え始めた。そこで予期せぬこと

が起こった。突然、いろんな叫びや苦しみや、何か訳の分からないものが私の中に無茶苦茶に突撃してきて、祝詞どころか自分の意識自体が途切れがちになり、グチャグチャになり、あまりの事外に逃げ出してしまった。

一度ホテルに戻り、心を整え、決意を固めた。葛城山の水、日本酒、米、梅干等をもって再び地下要塞に戻った。捧げ物をお供えし、祝詞を唱えた。自分の意識がき消されそうになるのに懸命に抵抗しながら、何とか歯を食いしばってお祭りを終えた瞬間、涙が止めどもなく流れた。そして私は、祖父だけでなく、そこに居るすべての戦死した霊人に、ともに帰国されるよう言いました。そう言わずに、その要塞の廃墟から出てくることなど、到底出来ないような状況でした。

絶望的な戦闘の中で命をなくし、その後慰霊に訪れるものもなく五十年、六十年とそのまま打ち捨てられたままの戦人たち。慰霊されるどころか、戦後経済的に栄え、前に前にと進む子孫たちからは忘れられ、心もぶつ切り切離され、ぼつんと置いてけぼりになったままの戦人たち。

祖父だけでなく、彼ら一般の苦しみや寂しさを見つけ出すのに、随分と時間がかかってしまったことを、私は済まないと思う。その鎮まらぬ叫びを、私は静かに引き受けて、自分の人生の中に溶け込ませて、ともに和み生きてゆきたいと思う。彼らの思いを引き受けた上での平和の心を、自らの中に、礎いしづか堅く切り開いてみたいと思う。

ハイラルからお迎えした霊人たちは、出口三平さんと大倭法主のおかげにより、今我が家に居て、ともに食事し、ともにお出かけし、穏やかに暮らしてきているように思います。

残骸と なりしかつての 要塞に

ひとこともなく 我はたたずむ

寸 莎

第69回

林 修 三さん



すべり台の上の雲

「寸莎」の枠では収まり切れない人生だろう、と躊躇していたのだが、今回思い切って大倭でよく見かける「ヒゲの中国語教師」の林さんに登場してもらったことにした。まずは、生い立ちから追ってみよう。

林修三さんは一九五二年（昭和二十七年）二月二十五日、大阪府枚方市で江戸時代から続く酢を製造する酢屋の二人兄弟の長男として誕生した。父親の定茂さんは学生相撲で大関まで昇りつめた人だったが、林さんが小学生の時に酢屋をたたんでサラリーマンに転身している。

「小さい時から自分は『変な子』で、近くの公園のすべり台に乗って空の雲ばかり見ていた」ということが、林さんという謎を解く一つの鍵になる。「枚方の小学校は好きでなくて、授業中に窓から外を眺めて、

あの山が倒れてきたら、というようなことばかり考えていて、通信簿に『授業中に奇声を発する』と書かれたことがある」と笑う。

九歳の時に父親が建設会社の支店長として博多に赴任することになり、林さんも中学三年までその地を過ごすことになるが、友達や教師にもめぐまれた時代だったようだ。

中学三年の夏休みに四條畷市に戻って来て近大付属高校に入学。「高校時代は亀井勝一郎や倉田百三などの人生論や日本や外国の文学など読書に熱中した」という一方で、フォークギターを楽しむ青春時代だった。

大学は、「漢文が好きだったのと、まだ国交がなかったことに興味を持って」、京都産業大学中国語学科に進学。当時、精神論とかオカルト本など片っぱしから読んでいたが、大学三年の時「桐山靖雄著の『密教占星術』に運命的に出会い、仏教の因

縁論にはまってしまった」。そして、大学四年秋から、因縁解脱を目ざして千日間毎日行を欠かさないと「千座行」をはじめた。この千座行は十年ほどの間に三回もくり返したというから、林さんの「行」への徹底ぶりには驚かされる。

五年で大学を卒業した時、桐山氏が主宰する観音慈悲会に「事務員という形で内弟子になることをすすめられ」、就職。この時期、さまざまな行者に出会ったり、滝行に励んだりしたのだが、「極度の緊張と疲労がたたって」一年あまりでヘルペスで寝込んでしまい、退職。

このころ、「ある人から修行による自分の驕り高ぶりを指摘され、打ちのめされる」体験をし、「ごく普通の生活をしなくては」と痛切に感じる。「好きだった盛岡の町に住んでみたり、大阪に帰って肉体労働をしていた」が、中国語学者の香坂順一氏の民間講習会に通いはじめ、中国語の学習を再開することになる。

その後、中国に短期、長期の留学をしたりして中国語教師として大きく育っていく歩みは、残念ながら別稿にゆずろう。ただ、一九八四年に三十二歳で結婚し、その二年後に有朋塾という中国語学校を大阪で立ち上げるまでの流れを聞いていると、「何ものかに背中を押されてき

た」としか思えないものがある。

こうした間にも道を求める真摯な歩みは続いていた。「ある方の助言を受け、全く個人的に仏陀が直接弟子に語りかけた言葉やさがすうちに、阿含経の中の法句経を見出し、仏陀に直接出会った思い」になったり、「あらゆるとらわれから自由になつて永遠の生につながることを説いたクリシュナムルティの言葉にふれた時、子供時代にすべり台の上から雲を眺めていた感覚が突然蘇ってくる」という深い経験をする。

「面倒なことたくさんある普通の生活の場で真理を生かしている」という林さんの思いは、やがて一九九一年八月の法主様との出会いにつながっていく。法主様の中に「宗教人を超えた宗教人」を見、「書物や経典からではない、生身の師を得た」と感じた。それ以来、大倭との縁がはじまる。

同時期に大本教の出口王仁三郎師にも深い興味を抱き、大本の人々とも縁を結んでいく。林さんの振り中の大きな魂の遍歴は、さまざまな人達との豊かな縁を織りなしていく。

「現界も霊界も、職場も家庭も大倭も、その他のさまざまなものも、自分の中でごく普通にまざり合っていて、力みがなくなってきた」と思うこのごろである。（聞き手「岸田哲」）

A W T C 日誌

4月12日 西斎庭において午後6時より大倭殖産と遊人会（大倭グループで働く人の交流懇親会）でお花見が行われました。殖産の社員はほぼ全員が出席、遊人会のメンバーとも友好を深めました。

4月14～16日 「あじさいの箱」の書道 押絵 生花 編物 手まり 俳句のチャリティオークルが、大倭会館で作品展を行いました。

4月15日 大倭神宮において簡負祭が開かれました。

4月16日 第288回文化行事。（5頁に報告記事）

4月19日 午後2時より大本宮拝殿において鈴月かあさんご帰幽満五年祭が開かれました。詳細は4頁をご覧ください。

4月22日 新奈良ゴルフ倶楽部で第6回大倭会ゴルフコンペ。今回は晴天の下気持よく、桜やツツジも満開で、参加者12名。午後5時よりは天平倶楽部で、邑交会と合同夕食会で、賑やかな交流の場となりました。

4月23日 大倭大本宮月次祭昭和37年4月23日の月次祭の法話テープをお聞きしました。

F I W C の O B、杉浩史さんが祭典の後で、『地面の底がぬけたんです』上演について話され、急遽、大倭会の文化行事とすることになりました。

4月24日 本紙編集会議中、早くも鏡池のウシガエル鳴き声を聞きました。

4月28～30日 交流の家で、F I W C がリーダー研修キャンプを行いました。

4月29～30日 水俣の高倉敦子さんが来邑。

4月30日 邑の吉澤光夫 満さんのお父さんで、昔、大倭で金属プレスの仕事をする時にご縁のできた、八尾市の吉澤修さん（86歳）が29日に帰幽され、この日、お通夜が行われました。

5月2～3日 東京都日野市の草場清則さんが、法主さんの葬儀の時を除くと30年ぶりに来邑。当時は、土竜みものという通称名で、ヒッピーという風でしたが、「法主さんが東京方面に来られた時はよくお電話を下さいました」という話です。

第290回 大倭会文化行事

NPO法人「むすびの家」・F I W C 関西委員会 主催

観劇 『地面の底がぬけたんです』

一結 純子が演ずるひとり芝居
あるハンセン病女性の不屈の生涯を観て「生きるということ」を考える

日時 平成18年6月18日（日）
午後2時集合・随時入場【2時30分開演】

場所 大阪府立中央図書館ライティホール 入口
Tel 06-6745-0170

交通 近鉄学園前にて急行13時27分発に乗り生駒13時29分着、近鉄東大阪線（けいはんな線）コスモスクエア行き13時38分発に乗り「荒本」13時47分着下車、徒歩10分

内容 原作は藤本としさんの同名の随想集、上演時間1時間45分、全国72箇所でご公演され反響を呼びました

チケット 1,500円（当日1,800円）

申込み 交流の家 松本トモ Tel 0742-52-1223
大倭印刷内 岸野春子 Tel 0742-44-0011

（注意）年間予定の当初の行き先「天理参考館」を変更しています

5月4日 鈴月かあさんの五年祭を期に、拝殿右横の倉庫の法主さんとかあさんの和服を邑の女性達が整理をしました。

5月6日 大倭神宮月次祭。

5月8日 予定のないゴルフデーンウィークをすごく心配していた昇ちゃんですが、何とか穏やかに過ごしたようです。

大倭安宿苑では

5月10日 天気予報がずれて幸い雨もなく、多くの来賓を迎え奈良パークホテルにて午前10時より法人成立50周年記念式典が行われました。式典に先立ち、成謙坊大善神にご挨拶もしました。住苑者は代表参加でしたが、各施設でもパーティ料理の昼食会でご共にお祝いしました。

4月1日 新年度より「奈良県



田植えの季節となりました。無農薬、EM農法で米づくりして9年目の春です。どうぞお参り下さい。

田植えのご案内

6月4日（日）

午前9：00～（雨天決行）

* 泥で汚れてもいい服装で。（着替え、タオル各自で準備）
* 軍手・軍足は用意します。
* 昼食・飲み物は用意します。（持込み歓迎）

連絡先 TEL 0742-41-4615
（玄徳院）

立」がとれ、運営が完全に大倭安宿苑に移管されました。

4月20日 通所療護の部門が新しく開所されました。

（須加宮寮）

4月23日 奈良県障害者スポーツ大会（卓球大会）に4名の住苑者が参加、残念ながら優勝者はいませんでした。

（長曾根寮）

4月15日 家族会総会で施設長をはじめ、新しい職員の紹介をしました。

（八重垣園）

4月26日 俳句クラブ。「ひなつばめ嘴そろへて軒の巢に」「侘び住居障子の外は花ざかり」「花の午後俳句談義に昏れにけり」

4月26日 俳句クラブ。「ひなつばめ嘴そろへて軒の巢に」「侘び住居障子の外は花ざかり」「花の午後俳句談義に昏れにけり」

4月26日 俳句クラブ。「ひなつばめ嘴そろへて軒の巢に」「侘び住居障子の外は花ざかり」「花の午後俳句談義に昏れにけり」

4月26日 俳句クラブ。「ひなつばめ嘴そろへて軒の巢に」「侘び住居障子の外は花ざかり」「花の午後俳句談義に昏れにけり」

A T M i C

* 月次祭（大倭神宮）
6月6日（火） 今月は都合で午後1時半より大倭神宮にて。
* 大倭会主催第四五一回禊会
6月11日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

禊（みそぎ）とは、自己本霊を覆っている枉罪（かみづみ）を祓い加美のお徳を戴くこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」という言葉が一体となってきた大和言葉。禊には、知恵の研鑽によって表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きによって内側から除く方法とがある。

* 月次祭（大倭神宮）
6月15日（木） 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭（大本宮）
6月23日（金） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。